

巻頭言



歯科補綴学の多様性の先に Beyond the diversity in prosthodontic research

日本補綴歯科学会 JPR 編集委員会 委員長
東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野 教授
東北大学病院 総括副院長

江草 宏
Hiroshi Egusa, DDS, PhD

Journal of Prosthodontic Research (JPR) 編集長の江草 宏と申します。この度、巻頭言への寄稿という貴重な機会をいただきましたので、学術誌を編集する立場から、歯科補綴学について、最近感じていることを綴りたいと思います。

約8年前、私はJPR誌に「増大する歯科補綴学研究の多様性」¹⁾と題して巻頭言を執筆しました。その当時、私が考えていたのは、超高齢社会への突入や科学技術の急速な進歩などを背景に、歯科補綴学は多様な学問領域を取り込みながら、口腔からの健康科学に貢献する学問体系に進化しなければならないという提言でした。

一方、ここ数年、凶らずもコロナ禍はICT(情報通信技術)やAI(人工知能)などの科学技術を強烈な勢いで刺激し続けています。また、ウクライナ情勢による資源高は、メタルフリー歯科治療をこれまで以上に後押ししています。このように、歯科を取り巻く政治・経済・社会・技術的な環境は予測不可能なほど目覚ましいスピードで変化しており、我々補綴歯科界も、いわゆる「VUCA(ブーカ)」の時代を実感します。VUCAは、変動性(Volatility)、不確実性(Uncertainty)、複雑性(Complexity)、曖昧性(Ambiguity)の各英単語の頭文字から成り、今の社会環境を端的に表す言葉とされています。

このVUCAな時代において、学術誌の編集方針を定めるのは容易ではありません。歯科を取り巻く環境や新たな技術の有用性や実現性について、誰もが正確な根拠をもって見通しを立てることが難しくなってきたからです。だからといって、私はこの状況を悲観的にとらえてはおらず、研究者の視点からは、むしろワクワクするような感覚を覚えます。考えてみれば、VUCAそれぞれの単語は、科学そのものです。人智の及ばない自然の摂理は、追求しようとする、移り気(Volatility)な振る舞いをします。科学では、“天動説/地動説”のように学説が覆されるのはよくあることで、結論が未来永劫に絶対的かどうかは分かりません(Uncertainty)。自然界は教科書にある事実よりも複雑(Complexity)で、その一端を捉えようと実験を繰り返しても、その結果は期待していたものよりも曖昧(Ambiguity)であった... という大学院生時代の思い出をお持ちの方も多いのではないでしょうか。

一方、VUCAな世界では、共通した絶対的な価値観が失われ、個人の「楽しさ」「好奇心」「情熱」「自己表現」「成長」がハイライトされるようになると言われます。私は、これらの要素こそが、補綴歯科にイノベーションをもたらし、歯科界を活性化するために非常に重要と考えています。では、どうすれば学術誌がこれらの要素を受け止める存在になれるのでしょうか。JPR編集委員会は、歯科補綴学に求められる多様性を基盤とした編集方針を継続し、その例として、デジタル技術、情報学、栄養学、老年学、分子生物学、医工学などを挙げ²⁾、これら領域のインパクトある研究を積極的に採択してきました。お陰様で先日発表されたJPR誌の2021年インパクトファクター(IF)は4.338となり、昨年に続いて補綴歯科系学術雑誌のトップを維持しました。ただし、

東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野
Division of Molecular and Regenerative Prosthodontics, Tohoku University Graduate School of Dentistry

これまで掲げてきた融合領域も、VUCA 時代ではもはや前時代の固定観念の範疇にあるのかもしれませんが。そもそも、JPR 編集長の私が、「IF でトップを目指しましょう！そのためには〇〇の研究を！」と暑苦しく語った時、VUCA な考えが当たり前となった読者にこそ、そのメッセージは響かないのかもしれませんが。

IF 自体が、時代と共に科学的な質や価値を反映しなくなり、絶対的な指標でなくなっているのも VUCA の一例なのでしょう。IF のような外因的な価値観の押し付けだけでは、もはや研究は活性化しなくなるのかもしれませんが。VUCA 時代の JPR 誌は、高い IF を狙うにしても、これを誇示するやり方ではなく、オープンサイエンスのもと、できる限り著者や読者の内因的な要素（楽しさ、好奇心、情熱、自己表現）に目を向けながら共に成長することで、結果的にグローバルに尊敬される存在でありたいと願っています。

これからの歯科補綴学に必要な真の多様性とは、結局のところ、VUCA な時代に各人に必要となる、未来を「描く力」と「切り拓く力」をもって、研究成果という形で自己表現する文化なのでしょう。教科書にあるクラウンブリッジ、義歯、インプラントの分類は、本質的には学問的な境界を設けるものではなく、あくまで治療のモダリティ（医療機器の分類）に過ぎません。どのような補綴歯科治療であっても、真のエンドポイントは患者の「健康・幸福長寿」に寄与したか否かです。人生 100 年時代にこれを達成する鍵は、従来の歯科補綴学が多様な学問領域と反応することで創出される知識や技術にこそあると信じてやみません。今こそ日本補綴歯科学会が世界をリードする学術団体になれるかどうか、マインドセットの変革を時代に試されているように思います。JPR 誌は日本補綴歯科学会誌と共に、皆様にとって身近で刺激的な情報源・発信ツールとして、本会および歯科界を支えて参ります。是非とも、皆様と一緒に VUCA 時代を創っていただけることを願いながら、筆を置きたいと思えます。

文 献

- 1) Egusa H. Increasing diversity in prosthodontic research. *J Prosthodont Res* 2014; 58: 191-2.
- 2) Egusa H. JPR continues to grow as a leading dental journal and international public asset. *J Prosthodont Res* 2021; 65: vi.